

元龜年間における大友氏の政治的・軍事的動向

〔元龜三年伊予出兵の検討を中心として〕

松原勝也

はじめに

天文十九年（一五五〇）の「二階崩れの変」に端を発した領国内部の軍事的混乱を収束させると、大友氏は北部九州への領土拡張を志向し、弘治（永祿初期には積極的かつ本格的な軍事的侵攻を開始する。その後永祿期を通じて、大友氏は当該地域で毛利氏やこれと連携した親毛利方勢力との間で激しい軍事的攻防を繰り広げていくが、こうした状況に重大な転換を迫ったのが永祿十二年（一五六九）末の毛利氏の九州撤退であった。これによって大友氏は残された親毛利方勢力を攻略すると共に、戸次鑑連ら有力重臣を配置することによって、北部九州支配体制を確立したと評価されてきたのである。しかしながら、こうして北部九州の平定に成功し、戦国大名権力としての「全盛期」を迎えたとされる元龜（天正初期の政治的・軍事的動向については、主に通史等で概括的に触れられる現状に止まっており、十分な研究成果が蓄積されているとは言い難い。こうした基礎的諸問題の解明を積み重ねながら、大友氏にとって毛利氏撤退以後の政治的・軍事的課題とは何か、そしてそれにどう対応していたのかという問題が、幅広い視点から具体的かつ総体的に問われる必要があると言えよう。

こうした課題の一端を解明するため、元龜三年（一五七二）七月の大友氏による伊予出兵を取り上げたい。従来、この伊予

出兵は「元龜三年四月、西園寺公広が土佐の一条兼定に挑戦したので、大友宗麟は女婿の兼定を救援して、佐伯惟教（以下、人名略）らの大友氏の水軍の主力を伊予に派遣した」とあるように、伊予西園寺氏が土佐一条氏を攻撃したことを契機とし、その救援を目的としたものであると捉えられている。こうした理解は地域史研究の場においても定着しており、まさに通説的理解であると言つて過言ではない。³⁾ところが、各氏の政治的関係や軍事的動向といった基礎的事項の多くが、軍記物を始めとする後世の編纂資料の記述に大きく影響を受けており、正確な実態が捉えられていない可能性は十分推測できるのである。

また、出兵が短期間に終始していることから、豊予地域における散発的・局所的な軍事行動に過ぎないものと過小評価され、大友氏研究の中で慎重かつ適切な位置づけがなされてこなかった側面も否定できないであろう。⁵⁾しかし、福川一徳氏が指摘したように、この伊予出兵は当該期における大友・毛利関係の推移と密接に関わっていたものとみられ、その具体的様相を検討することが、親大友方勢力との連携の具体的様相や毛利氏動向への対応の在り方といった、対毛利氏戦争における大友氏動向の実態解明に大きく寄与すると考えられる。そして後述のように、それは大友氏の北部九州における支配動向とも関連を有しており、当該期における大友氏の政治的・軍事的動向総体からみても看過できない動向であることは間違いないものとみられる。

本稿では、信憑性の高い一次史料に基づきながら、伊予出兵の経緯や目的といった実像を慎重に検討し、その意味を当該期における大友氏の政治的・軍事的動向との関わりの中で捉えてみたい。

一 伊予出兵の背景

1 元龜三年初頭の豊予情勢

では、まず出兵が行われた元龜三年初頭の豊後・伊予情勢を示す以下の史料から、その背景について検討してみたい。

小見山水之平遠、敵取寄之段、預注進候、無心元存候、決者此方行可差急之通承候之条、前十五田原近江守差立候、其外寄々之者共堅固申付候間、於赤間関表必近々可着陣候、警固船之事或堅加下知候、可御心安候、爰元聊無緩之趣、島源兵衛尉令存知候、弥不可有油断候、猶年寄共可申候、恐々謹言、

潤正月十九日 (元龜三年) 宗麟 (花押)

村上掃部頭殿 (武志)

『先哲』四一四五〇

△史料②▽

就中国行、浦上遠江守入魂之旨候之条、至所々警固船之儀申付候、折節從村上掃部頭所、申越子細候之条、船催之事可差急覚悟候、其国諸浦之事、臼杵新助被申合、堅固被申付事肝要候、將又麻生撰津守現形之条、早々可討果之段申出候、氏貞被申談、不拔足様、才覚專一候、聊不可有御油断候、恐々謹言、

二月廿二日 (元龜三年) 宗麟 (花押)

戸次伯耆守殿 (發連)

『先哲』四一四五二

△史料③▽

至備中表、吉川・小早川取出候之条、浦上宗景遂對陣、防戦半之段、注進及度々候、於能島表茂、芸州衆取向候之間、此節加勢無余儀候、如存知、近年驅催中国衆、兩川令渡海候折節、宗景被頭貞心候、村上掃部頭事茂同前之条、彼兩人江可加力依覚悟、於赤間関口急度一勢差出、一行為可申付、為先陣田原近江守出張候、其国衆中之事、親賢被申合、乍御辛勞別而可被勵馳走事、可為祝着候、猶年寄共可申候、恐々謹言、

三月六日 (元龜三年) 宗麟 (花押)

五条殿

『先哲』四一四五四

まず史料①によれば、この時期伊予国越智郡能島を拠点とする海賊衆村上武吉が「敵」に攻撃を受けており、「此方行可差

急」と大友氏に早急な支援対策の実施を要請していることが窺える。能島村上氏は永祿末年に毛利氏から離反しており、そのため元龜二年（一五七一）三月には毛利勢が能島村上氏の枝城務司を攻撃し、同年七月には小早川隆景や来島村上氏らによる攻撃が確認できるなど、この時期毛利方勢力から断続的に攻撃を受けていた。^⑤史料③に「於能島表茂、芸州衆取向候」とあることから、元龜三年初頭、能島村上氏に対して軍事的圧力を加えていた「敵」とは、毛利氏もしくは毛利氏に与する勢力であるとも見て間違いないと思われる。

こうした情勢下で、史料①によれば、大友氏は能島村上氏に対する二点の支援方針を打ち出しているが、まず第一に示されたのが重臣田原親賢の長門国赤間関への軍事進攻であった。親賢は閏正月十五日に赤間関表に向けて出陣したとされ、その後三月には「於赤間関口急度一勢差出、一行為可申付、為先陣田原近江守出張候、其国衆中之事、親賢被申合、乍御辛勞別而可被励馳走事、可為祝着候」（史料③）と、大友氏は五条氏ら筑後国衆に対して赤間関表への出陣と、先発していた田原親賢との軍事的共同行動を求めている。この時の田原及び筑後国衆による具体的な戦闘行動は明らかではないが、能島村上氏支援を目的とした大友氏の赤間関表での軍事活動には、当初からこの両者が主体的役割を担う存在として期待されていたものと想定できよう。

次に「警固船之事」についてである。史料②によれば、能島村上氏から支援要請を受けた大友氏は、当時筑前国支配に重要な役割を担っていた戸次鑑連・臼杵新助に対して早急な「船催」の必要性を伝え、筑前国内諸浦に対する徴発を両者に命じている。こうして動員された筑前国内の水軍力が、大友氏による能島村上氏支援活動の中でどのような役割を担っていたかを具体的に示す史料は確認できないが、地理的關係からみても、前述した田原や筑後国衆による赤間関表での軍事行動と密接不可分であった可能性は非常に高い。また前年の元龜二年七月には、「能島要害為合力、阿州衆岡田権左衛門・塩飽者共、以船手水兵糧差籠候処、沼田警固并来島・因島衆懸合」と、阿波・讃岐衆が能島村上氏に対する物資救援を行い、警戒中であつた毛利方水軍と交戦している。大友氏が期待する「船催」には、こうした能島村上氏に対する直接的な物資支援や、それを阻止し

ようとする毛利方水軍との戦鬪行為も内包していたと推測できよう。一方で、能島村上氏の活動範囲は筑前にも及んでおり、同氏が北部九州方面からも兵糧・物資の補給・調達を行っていた可能性は十分想定できる。同氏自ら確保していたであろう補給ルートを支援・警備する意味からも、大友氏には適切かつ迅速な対策が求められていたものとみられる。

こうして大友氏は毛利氏の軍事的圧迫を受けていた能島村上氏の支援に取り組んでいくことになるが、史料②及び③からも窺えるように、その支援対象には備中浦上氏も含まれていた。「至備中表、吉川・小早川取出候之条、浦上宗景遂対陣、防戦半之段、注進及度々候」(史料③)とあるように、この時期、能島村上氏同様に浦上氏も毛利氏の軍事的圧迫を受けており、再三にわたって大友氏側に戦況を通報するなど緊密な連携を取っている。能島村上氏に対する支援策として打ち出された赤間関出兵と警固船徴発についても、史料②に「就中国行、浦上遠江守入魂之旨候之条、至所々警固船之儀申付候」、史料③に「彼両人江可加力依覚悟、於赤間関口急度一勢差出」とあるように、それには浦上氏を支援する意味も含まれていたのである。ではこの時期、大友氏が「彼両所江御加勢無余儀」(『先哲』四一―四五五)と、能島村上・浦上両氏に対する支援の必要性を強く認識とするに至った背景にあるものは何なのか。それを当該期における両氏の動向や大友氏との関係からみておきたい。

2 能島村上・浦上両氏支援の理由

△史料④▽

追而

旧冬進飛脚候之處、御懇意之次第祝着候、先書如申候、今度小早川・吉川以渡海、豊前・筑前競望之企、不及言語之間、宗麟至此表令出張、不抜足様可討果才覚議定之条、可御心安候、然者其表以手切、於被頼心底候、向後永々不可有別儀可申談候、然処毛利当方和睦之批判有之之由承候、誠驚存候、近年元就表裏之覚悟、遣恨深重之条、既発足候之上者、和談之儀、日本国中大小神祇殊八幡天神茂照覽、尽未来際可為議絶候、無疑心、早々可被頼貞心事、頼存候、殊輝弘申談上者、

争可有別心候、中国籌策之様躰、是又過半相調分候、銘々從弘可有御入魂之条、不及口能候、両家申合元就閉目之儀者、何様不可有余儀候、委細用口上候、恐々謹言、

(永祿十二年)
三月十六日

(大友)
宗麟 (花押)

(宗景)
浦上遠江守殿

『先哲』四一—二二四

△史料⑤▽

前日、以戸次□□・□田□喜如申候、吉川・小早川引率中国衆、立花表渡海之砌、浦上宗景申合、前後之調略依無油断、敵悉没落候、併両川事、就討漏候、今又備中堺目江取出、防戦半之段到来候、則可加勢之处、遼遠故不任所存之条、至赤間関口、一行無余儀存候、今年各在陣、苦勞雖無尽期候、宗景・同村上掃部頭及難儀之由申来候条、此節不顯心底候者、後略之覚、外聞不可然候間、乍御苦勞、此節可被励馳走事肝要候、就中上口之儀、両川如存分之於券立者、向後北方氣仕不可有止事候之条、急度一勢差出、自他申談候者、可明永々之隙候、能々有思惟、別而可被添心事可為祝着候、猶年寄共可申候、恐々謹言、

(元龜二年)
十二月廿八日

(大友)
宗麟在判

(鎮隆)
志賀兵庫頭殿

『先哲』四一—四四六

史料④によれば、北部九州において大友・毛利両氏が激しい軍事的対立を繰り広げていた永祿十二年(一五六九)三月、宗麟は浦上宗景に対し、毛利勢の九州渡海という事態に際して自身の出張を伝えた上で、当時巷間に流布していた大友・毛利間和睦の噂を明確に否定し、毛利氏との早々の手切を求めている。一方で、この時期大友氏は尼子氏旧臣層とも交渉しており、「勝久御一家再興此節候之間、各別而有馳走、被遂本意肝要候」と、勝久擁立による尼子氏再興を強く促していた。こうした中国方面の反毛利方勢力に対する働きかけからは、毛利氏の背後を動揺させることで戦況を優位に進めたい大友氏側の強い意向が看取できよう。そして、その後十月に大友氏の下へと到来した浦上氏の使者は、「上口之事、尼子勝久衆・宗景申談之、

無残所屬案中、宇喜田和泉守改先非、懸望依不淺令救免、聊無氣遣、彼境每事任存分之由候」と述べたとされ、浦上氏が尼子氏と緊密に連携を図りながら、備作方面で親毛利方勢力の攻略にあたっていたことが窺える。大友氏の浦上氏への働きかけはこうした形で結実しており、期待通りの結果をもたらすこととなったのである。

また史料④の最後部では「殊輝弘申談上者、争可有別心候、中国籌策之様躰、是又過半相調分候」とあり、当時大友氏の下に寄宿中であった大内輝弘との関係や、中国方面に対する計略の進捗状況についても浦上氏側に伝えられている。この七ヶ月後の永禄十二年十月、輝弘は大友氏の支援を受けて周防山口へと進撃し、毛利氏が九州から撤退する重要な契機となるが、既に五月の時点で、輝弘は大友氏の要請に基づいて周防渡海を行う意志を明らかにしていた。同じ頃、大友氏が尼子氏旧臣に対して「至防長一行之儀、預入魂候、得其意候」と述べていることも踏まえるなら、浦上氏側に伝えられた「中国籌策之様躰」には、輝弘の防長侵攻に関する内容も含まれていたと想定するのが妥当であろう。激化する対毛利氏戦争を打開する方策として、大友氏権力内部では当初から輝弘の周防渡海を企図しており、その準備段階においては、浦上氏や尼子氏といった中国地方における反毛利方勢力との綿密な連携が重要な意味を有していたのである。そして、こうした浦上氏との連携は「吉川・小

図1 伊予出兵関係地図



早川引率中国衆、立花表渡海之砌、浦上宗景申合、前後之調略依無油断、敵悉没落候」(史料⑤)とあるように、北部九州からの毛利氏撤退にも大きく貢献したと大友氏側が認識する程のものであった。大友氏が対毛利氏戦争を優位に進める上で、浦上氏は極めて重要な役割を担っていたものと認識しておく必要がある。

一方、能島村上氏について、『陰徳太平記』によれば永禄十一年(一五六八)十月頃より周防上関に在城し、周防灘を警固していた村上武吉は、翌年毛利氏の九州出陣に際し、病氣と称して戦線を離れて上関に引き籠もったとあり、これによって打撃を受けた来島村上氏や小早川隆景との関係が悪化したとされている。¹⁵⁾同書はこの時期能島村上氏が毛利氏から離反し、大友氏へと結びつく経緯を示すものとしてしばしば引用されるが、後世の軍記物という史料的人格、そして永禄十二年六月に能島村上氏が豊前表で大友氏方の船舶を攻撃していること¹⁶⁾から、その事実関係については慎重に見極める必要が指摘されている。そうした中で、金谷匡人氏が輝弘の周防渡海と関連させた上で、能島村上氏が周防灘を警固していたにも関わらず、それが実現したのは「これ以前に村上武吉が毛利氏の陣宮から離れたことによる結果」としているのは説得的である。¹⁷⁾つまり能島村上氏が大友氏と交戦した永禄十二年六月からさほど経たないうちに両者間で何らかのコンタクトがあり、それが『陰徳太平記』に窺えるような能島村上氏の戦線離脱、そして輝弘の周防渡海へと展開していったものと考えられるのである。先に述べたように、輝弘の周防渡海は対毛利氏戦争が激化する中、大友氏が中国方面の反毛利方勢力と連携を取り合いながら綿密に企図していたものであり、戦況を優位に展開する上で非常に重要な効果をもたらしていた。それを実現させるためには、周防灘を警固していた能島村上氏の取り込みが絶対不可欠な条件だったのであり、この時期大友氏が浦上氏や尼子氏同様に、同氏に対して緊密な連携を強く働きかけていたことは間違いなかる。

以上、永禄末年の北部九州における大友・毛利戦争において、大友氏は能島村上・浦上両氏と綿密な連携を取り合っており、両氏の動向は毛利氏の北部九州からの撤退にも大きく関わっていた。大友氏が元龜三年の時点で、毛利氏の軍事的狂迫を受け、両氏の支援に取り組み必要性を強く認識していたのは、こうした大友氏に対する多大な貢献が背景にあったことを踏まえて

おくべきであろう。大友氏にどつて両氏を支援することは、「宗景・同村上掃部頭及薙儀之由、申来候条、此前不顕心底候者、後略之覚、外間不可然候」(史料⑤)とあるように、対毛利氏戦争を優位に展開したいという軍事戦略上は勿論、上級権力者たりうる政治的地位や権威、それに基づく巷間の評判を維持するという側面からも強く求められていたのである。そして、こうした経緯は史料③に確認されるように、大友氏が筑後国衆に赤間関表への出陣を命じた際にも伝えられていた。そこには「如存知」とあるように、当該期における能島村上・浦上両氏の動向や大友氏との緊密な関係というものは、筑後国衆も十分に承知する程の事実であり、大友氏がこれらを両氏支援の名目で軍事徴発する上での論拠となりうるものだったことが窺えるのである。

しかしながら、能島村上・浦上両氏に対する支援活動を含む大友氏の毛利氏対策は、後述のように容易には進まなかった。そしてその延長線上に伊予出兵は浮上し、実行に移されていくのである。

二 伊予出兵の実像

1 出兵直前の中国情勢

△史料⑥▽

三月十一日之貴札到着、令拜見候、如仰近年宗景別而申談候、然処、芸州不慮之存分共候而、及鉾楯候、其表堅固之御覚悟之故、備作無異儀之由候、本望候、此口之儀も随分相支候、乍恐可御心安候、就中龜井鹿介方、頃但州御在身之由候、専要ニ存候、豊州御行御延緩故、諸国之行不相応候、雖然、旁御覚悟無二之首尾候者、各可為勝利事、覚前之儀候、仍視一面送給候、遼遠之御懇志云、爰元之珍器云、自愛不一候、猶期万吉令省略候、恐々謹言、

(元龜二年)

卯月八日
武吉(花押)

(尚春)
牧兵庫助殿 御返報

(「牧」二七)

史料⑥は元龜三年（一五七二）春、能島村上氏と美作國衆三浦氏の重臣牧氏との間で情報交換が行われたことを示す史料である。これによれば「如仰近年宗景別而申談候」と、この時期能島村上・浦上間で緊密な連携が行われていたことが明示されており、牧氏からは備作情勢と共に、当時山陰で反毛利活動を行っていた尼子氏旧臣山中鹿介の動向が伝えられていることが窺える。その中で特に注目したのは、武吉が「豊州御行御延緩故、諸國之行不相心候」と述べている部分である。冒頭の「三月十一日之貴札」を指すとみられる牧尚春書状に「此節自豊州至防長御進発候者、以其響雲伯之儀、可及道候分ニ候」とあることから判断すれば、この「豊州御行」とは赤間関への軍勢派遣を中核とした大友氏による毛利氏対策を意味するものと考えられよう。毛利氏の軍事的脅威に晒されている親大友方勢力は、毛利氏への軍事攻撃という大友氏側の積極的な対応と、それに伴う当該地域情勢の好転に強い期待を抱いていたのである。先にみたように、大友氏側としてもこれらを支援する必要性や、その意義の重要性は十二分に認識していたはずであった。しかしながら大友氏による毛利氏対策は遅延しており、中国の親大友方勢力も適切な対応が取れずにいるとの状況認識を武吉が示しているのである。

以上を踏まえれば、能島村上・浦上両氏支援の中核ともいえる大友氏の赤間関への軍勢派遣は、元龜三年初頭にその実施が表明されたにもかかわらず、四月初旬の時点においても実現していなかったと考えられる。とすれば、先に述べた閏正月十五日時点における田原親賢の赤間関出陣も実現しなかったか、もしくは出陣していたとしてもさしたる軍事的成果を挙げ得なかったものと想定できよう。そのために能島村上氏を取りまく状況も停滞を余儀なくされ、「此口之儀も随分相支候」とあるように、引き続き毛利方勢力による軍事的圧迫を受け続けることになったのである。それは浦上氏も同様であり、これら親大友方勢力が大友氏の積極的対応に大きな期待をかける状況、そして大友氏がこれらを支援する必要性は依然として継続していたものと想定できよう。

そうした中、中国情勢は極めて重要な局面を迎えていたのである。

就其表立柄之儀、示預候之趣、各申談令披露候、爰元於行者、室被申付、赤間関口并与州目茂兵船渡海之儀、急速被申催候之条、其境之儀、浦上宗景被仰合、火急御調略肝要候、委細直被申候之条、不草口能候、仍硯一面得御意候、御丁寧之至畏存候、猶重々可申承候之間、閣筆候、恐々謹言、

(元龜三年)
六月十六日

(志賀)
親度(花押)

牧兵庫助殿 御報

(「牧」四九)

「石見牧家文書」によれば、元龜三年(一五七二)六月、大友・牧間で頻繁な連絡交渉があったことが確認できるが、それは史料の冒頭に「就其表立柄之儀、示預候」とあるように、牧氏から通報された中国情勢の重大な変化が契機となっていた。元龜三年閏正月、毛利氏は備後国衆樗崎氏に対して「当春動之事、催無油断候」と述べており、元龜三年初頭時点で山陽方面での軍事攻撃を計画していたことが確認できる。そして六月には「只今之儀者、備中表就出張之儀、御行之相談半之事候」とあり、この時期浦上氏らに対する軍事攻撃の準備は着々と進められつつあった。しかも毛利氏は前年の八月、再興を旨とする尼子勝久の軍事攻略に成功しており、山陽方面に存在する親大友方勢力の軍事掃討に専念できる体制にあったのである。これに対して大友氏は「其境之儀、浦上宗景被仰合、火急御調略肝要候」(史料⑦)と、浦上氏と連携した上での早急な調略を牧氏に求めている。迫り来る毛利氏の軍事攻撃は、中四国の親大友方勢力にとって極めて深刻な事態の招来を意味しており、大友氏に対して早急な支援対策を強く期待していたものと推測できよう。

そのような状況下で、大友氏内部では「赤間関口并与州目茂兵船渡海之儀、急速被申催候」と、以前より表明していた赤間関表への軍事攻撃に加えて、伊予方面に対する軍事行動が急遽浮上しているのである。こうした大友氏の方針決定に、この時期の山陽方面における情勢緊迫化が関連していなかったとは考え難い。従来、大友氏の伊予出兵は伊予西園寺氏による土佐一条氏攻撃を契機とし、縁戚一条氏の救援を目的としたものと理解されてきたが、一連の大友・牧間交渉の過程、そして「石見牧家文書」以外の当該期一次史料からは、そうした動向を窺わせる記述は一切確認できない。これらから判断すれば、後世

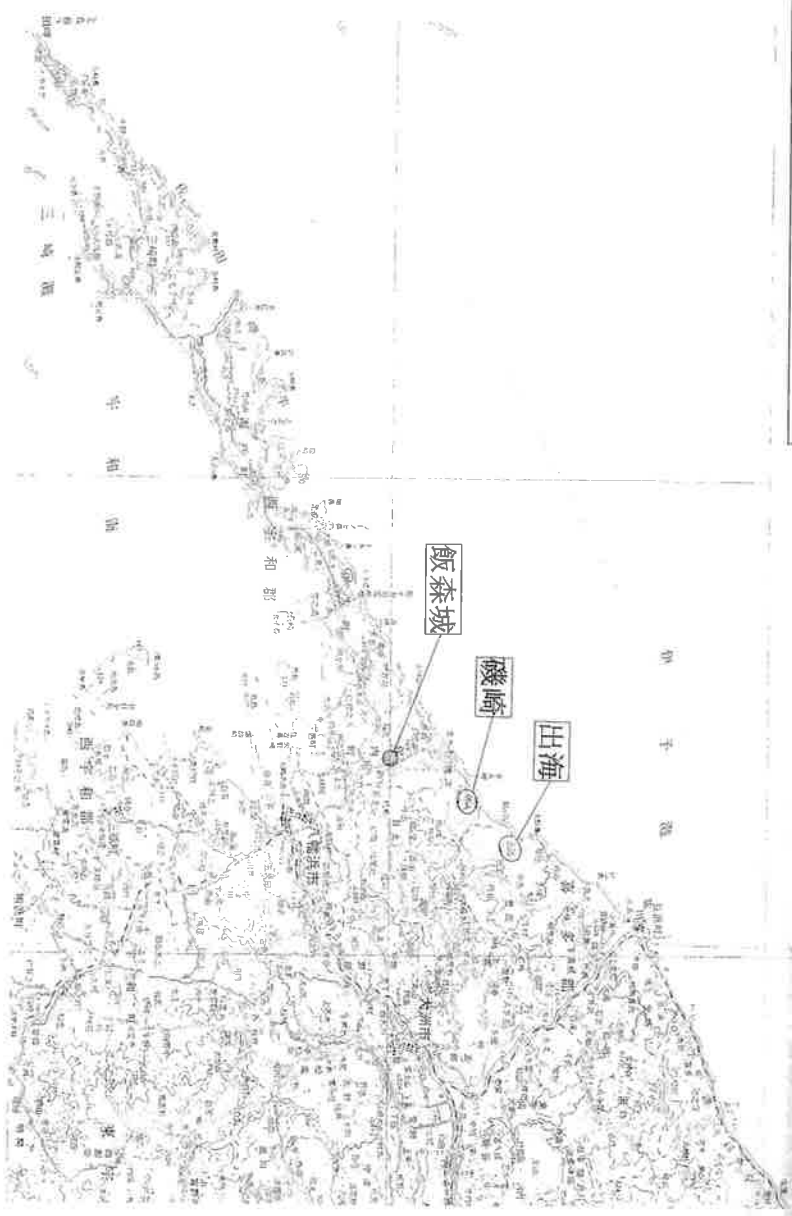
の諸記録に強い影響を受けていた従来の通説的理解のみに依拠して、大友氏の伊予出兵を理解する必然性は低いと言わざるを得ないのである。また、これまで繰り返し述べてきたように、赤間関表への軍事行動は当該期の大友氏による毛利氏対策の核心的方針であった。伊予への軍事行動がこれと併記され、その上で毛利氏との交戦が迫りつつあった牧氏に伝えられたという経緯を勘案しても、やはり伊予出兵は毛利氏の山陽方面における動向と密接に関係しており、同地域の親大友方勢力を支援する目的を有していたと捉えるのが妥当であると考えられるのである。

2 飯森攻撃の実像と同所の地域的様相

以上のような背景と目的をもって大友氏は伊予出兵を実行に移していくが、実際に伊予へと渡海したことが確認できるのは、佐伯惟教や鶴原宗叱、若林鎮興や薬師寺氏などである（『先哲』四一―四七三―八〇、八二）。これらはいずれも海部郡沿岸に基盤を有しており、自前の水軍力を保持していた。⁽²⁴⁾「殊与州表ニ兵船数百(艘)被差渡候」（『牧』四八）ともあるように、こうしたいわゆる海部水軍が伊予派遣軍の主力を構成していたものとみられる。その中でも「今度其表於所々軍勞之次第、從佐伯惟教到來」（『先哲』四一―四七七など）と、佐伯惟教が若林・薬師寺らの軍功注進を行っているという事実からは、当時加判衆であった惟教が伊予派遣軍の軍事指揮権を保持していたことを窺わせよう。この佐伯惟教は既に指摘されるように、弘治二年（一五五六）に勃発した小原鑑元の乱に関連して伊予へと逃れ、その後永祿末年に赦免され帰国するまでの間、西園寺氏の庇護を受けたとされている。⁽²⁵⁾伊予方面の情勢や地理的位置関係に通じた佐伯氏の起用は、大友氏が最善かつ適切な人員配置と戦略をもって当該地域の攻略に臨んでいた可能性を示唆していよう。

また、『大友家文書録』綱文や『大友興廃記』などによれば、大友氏は元龜三年（一五七二）四月段階から伊予での軍事活動を行っており、現存する一次史料から明確に確認できる七月十九日の飯森城攻撃は、西園寺氏攻略後の残党勢掃討といふ意味合いが濃いものとして描かれている。しかし、先にみたように、大友氏の伊予出兵は元龜三年八月の段階で浮上したもの

图2 飯森周辺地図
(国土地理院発行20万分の1地図「松山」より)



であり、こうした位置づけが正確な事実を反映していない可能性は極めて高い。実際、六月二十七日の時点においても「既兵船出津之催、一両日議定候」〔牧〕三九〕とあり、佐伯惟教ら大友勢の伊予渡海は依然として実現していないことが窺えるのである。大友勢の伊予渡海は早くても七月初旬であるともみられ、飯森城への攻撃は渡海して早々の軍事活動であると捉えるのが妥当であろう。

この飯森城攻撃を示す一次史料から大友氏の交戦相手を特定することはできないが、少なくとも大友氏と敵対している以上、この時期毛利氏と関係の深い勢力であったことだけは間違いない。これを前提とした上で、この時期飯森を確保していた勢力や当該地域一帯の地域的様相について、できうる限りの検討を加えてみたい。

戦国期において同所は、大洲に本拠を有する宇都宮氏庶流の萩森宇都宮氏の勢力域であるとされているが、その宇都宮氏は永祿十一年（一五六八）、毛利氏の軍事的支援を受けた河野氏によって攻略されている。これに伴って、毛利氏の政治的・軍事的實力を背景とした河野氏の影響力が、次第に当該地域周辺にも浸透していったことがまずは推測できよう。その河野氏も元龜年間に入ると当主権力が弱体化しており、権力内部には大友・毛利双方と連携した勢力が存在するなど、微妙な政治的スタンスが窺える。その中でも特に毛利氏との関係が深かったとされるのは来島村上氏であるが、以上の状況を踏まえれば、同氏かこれに近い河野氏内部の親毛利方勢力が、この時期飯森を確保していた可能性は十分想定できよう。また『大友興廢記』には「飯森の城にはいつミ・いさきと云所の侍籠り」とあり、飯森近辺に拠点を有する出海・磯崎衆が飯森城に籠城し、大友氏と交戦したとされている。両所はいずれも伊予灘沿岸部に位置しており、これらは何らかの形で当該地域水運との関わりを保持しうる存在であったものとみて、まず間違いなからう。具体的な事実関係は不明ながらも、飯森城が伊予灘で活動する海上勢力と深い関係を有しており、有事の際にはこうした周辺在地勢力の詰め城として機能していたとしても何ら不思議ではない。とすれば、これらが同様の性格を有していた上級権力河野氏や来島村上氏と結び付きを有し、その勢力下にあった可能性は高い。

さらにこの出海・磯崎両所の地域の様相についてみてみると、天正四年（一五七六）に伊勢参宮を行った西園寺宣久は、その帰路瀬戸内海を下って出海に着船しており、その後陸路で本拠黒瀬に向かっている。また当該地域一帯を含む矢野保に權益を有していた室町幕府幕臣摂津氏は、戦国期に入ると八幡浜へと下向するが、その際磯崎浦に着船したとされており、「磯崎浦が矢野保の外港として機能していた可能性」が指摘されている。このように両所は瀬戸内海水運と深く関わっており、伊予灘に面した当該地域一帯の中で重要な交通拠点の一つであった。逆に八幡浜・宇和方面からみれば、豊予海峡という航海上の難所の存在によって、両所はまさに瀬戸内海への「玄関」として極めて重要な役割を担っていた地域だったと考えられるのである。

先に明らかにしたように、毛利氏の出兵に伴って備作方面の軍事的緊張が高まりつつある中、大友氏は毛利氏と敵対する中四国の親大友方勢力を支援する必要に迫られていたが、大友氏自身が「則可加勢之処、遠遠故不任所存」（史料⑤）と述べているように、遠く離れたこれらに対して直接的な軍事支援を行うことは困難であった。そのような状況下において、大友氏には親大友方勢力を取りまく軍事的緊張状態を緩和するために、たとえ一時的であったとしても毛利氏が当該方面に対する軍事行動を中断し、大友氏の動向を注視せざるを得ない程の軍事的インパクトを与えることが求められていたものと想定できよう。その大友氏が実際に攻撃を加えた場所が飯森だったということは、伊予出兵の意味を理解する上で看過できない重要な意味を有していると考えられる。飯森周辺地域一帯は伊予灘における海上通行と深い関係を有しており、瀬戸内海と南予とを結ぶ重要な交通上の結節点であった。大友氏が出兵にあたって当該地域を攻略目標に定めた理由が、こうした地域の様相と全く無関係であるとは考え難い。大友氏にとって飯森周辺地域一帯を軍事攻略することは、豊後水道のみならず伊予灘の制海権をも握る上での橋頭堡を確保し、瀬戸内海西部海域における軍事的プレゼンスの強化につながる可能性を十二分に有していたものと考えられよう。

また、西園寺氏はこの時期毛利氏と近しい関係にあるが、³⁰両者間や来島村上氏など親毛利方勢力との連携を遮断する意味か

らも、当該地域はまさに最適かつ効果的な場所だったと思われる。周辺の在地勢力が最終攻防拠点として籠城したとされることから窺えるように、飯森城はまさに当該地域のランドマーク的存在であり、大友氏にとって当該地域の安定的掌握を図る上からも、その攻略と接收は避けて通れない重要課題であったものと捉えられよう。

三 元龜年間の大友氏動向と伊予出兵

1 北部九州情勢との関連

先に挙げた史料⑥において、村上武吉は「豊後御行御延緩」と、元龜三年（一五七二）四月時点で大友氏の政治的・軍事的動向が遅延していると述べていた。大友氏にとっては中四国の親大友方勢力に対する速やかな支援が要請されている状況下で、こうした事態に至っている理由とは何なのか。それを当該期の大友氏を取りまく政治的・軍事的状況との関連から検討してみたい。

永祿十二年（一五六九）末に毛利氏が北部九州より撤退した後、大友氏は高橋鑑種を始めとする当該地域の毛利方勢力を攻略すると共に、立花城や宝満・岩屋両城といった重要拠点を接收し、新たに戸次鑑連や高橋鎮種らを配するなどして支配体制の再編成を行っていく^⑦。そして元龜元年（一五七〇）三月に豊前・筑前両国の掌握を表明すると、大友氏はすぐさま肥前龍造寺氏の軍事攻略に着手するが、これには当主宗麟自ら出陣しており、この時期大友氏が以前から反大友的姿勢を繰り返していた龍造寺氏の存在を深刻な桎梏と捉え、その軍事討滅を強く意図していたことを窺わせよう。その後両勢力は筑後・肥前国境周辺で激しい軍事衝突を繰り返していくが、同年八月の今山合戦で大友氏は敗北を喫し、それを契機に事態は両氏間での和睦成立へと推移していった。この和睦によって、当該地域は一時的な情勢安定化を遂げることとなったが、大友氏側からみれば龍造寺氏を軍事討滅する絶好の機会を逸し、大きな懸案材料を残す結果となったのである。このように毛利氏の撤退後、大友

氏は軍事行動などを通じて北部九州情勢の安定化に尽力しており、大友氏によって当該地域支配の安定・強化は重要な課題であったと捉えられよう。

その一方で、九州から撤退した毛利氏は山陰方面へと転進しており、出雲国内で反毛利氏活動を展開していた尼子勝久に対する攻撃を行っている。そして元龜二年（一五七二）八月には勝久の軍事攻略に成功し、毛利氏は残る山陽方面における反毛利方勢力の掃討へと軍事方針をシフトし始めていた。こうした状況下で、大友氏は「就中上口之儀、両川如存分_レ之於券立者、向後北方気仕不可有止事候」（史料⑤）という認識を示している。若干文意の取りづらい文言があるが、意識すれば「上口（＝備作方面）の政治的・軍事的情勢が両川（＝吉川・小早川）の思い通りの展開となってしまうのは、今後北方（＝毛利氏）の軍事的脅威は止まることがない」ということになるのか。つまり毛利氏が尼子氏に続いて浦上氏などをも攻略するような事態になれば、再び北部九州をめぐる毛利氏と激しい軍事抗争が行われる可能性は高いと、大友氏側が危惧していたことが窺えるのである。毛利氏による北部九州への再侵攻について、大友氏内部では毛利氏が撤退した時点より懸念されていたものと推測できるが、重要懸案であった北部九州支配体制の再構築に専念する状況を確認するためにも、それはできうる限り回避する必要があったものと考えられる。であるからこそ、この時期大友氏は毛利氏動向に細心の注意を払うと共に、中四国の親大友方勢力と緊密な連携を取り合い、これらの反毛利活動を側面から支援する必要があったのである。

しかしながら、このような大友氏による毛利氏対策は順調に進まなかった。能島村上・浦上両氏を支援するため、大友氏が戸次鑑連に対して筑前国内の水軍力徴発を命じた史料⑥には、「麻生撰津守現形之条、早々可討果之段申出候」とあり、元龜三年二月頃、同国遠賀郡花尾城を拠点とする麻生氏が大友氏から離反したことが示されている。この麻生氏の離反に対し、大友氏は鑑連にその攻略を命じているが、「就今度麻生撰津守誅伐之儀、田原近江守以同陣、從最前別而馳走」（『先哲』一四六一）とあるように、田原親賢が佐田・成恒ら宇佐郡衆を率いて麻生氏攻略に参陣し、多大な軍事的貢献を行っていることが確認できる。先に述べたように、親賢は元龜三年閏正月に赤間関表へ出陣したとされていたが、にもかかわらずその軍事行動

の形跡が史料上窺えなかったのは、このように親賢自身が麻生氏攻略に深く関与していたためであった。大友氏の赤間関出兵が実行に移されていく最中に起きた麻生氏の離反には、これを阻止しようとする毛利氏側の策動があった可能性を想定せざるを得ないが、その具体的様相や大友・麻生両勢力による交戦の様子などについては明らかでない。しかし三月初旬になると、史料③にあるように親賢は再び赤間関表での軍事行動に従事しようとしており、麻生氏は遅くともこの時点までには親賢ら大友方勢力によって軍事攻略され、混乱は鎮静化したものと考えられよう。

こうして大友氏による赤間関表への軍事行動は、麻生氏の離反とその攻略によって一旦は中座を余儀なくされるが、再びそれが実現に向けて動き出していく中、今度は肥前情勢が大きく揺れ動き始めていくのである。

△史料④▽

為龍造寺隆信、当要害近辺迄相動候処、稠被遂防戦、当城無別儀之由、言上之趣、則令披露候、堅固之覚悟肝要之通、被成 御書候、然者筑後・筑前衆塚目迄差寄、無事之助言専要之段、被 仰出候、自然隆信強而一雅意之子細候者、重々依注進、可被成其 御心得候、為御存知候、恐々謹言、

卯月二日
(元龜三年)

(白井)
鑑速 (花押)

(志賀)
親度 (花押)

(吉岡)
宗欽 (花押)

横岳弥十郎殿
(鎮貞)

『先哲』四一—四六四

史料⑧などによれば、元龜三年(一五七二)三月末、龍造寺隆信は隣接する肥前国東部の三根郡へと侵攻し、横岳氏の居城西島を攻撃するなど、この時期龍造寺・横岳間の軍事的対立が激化し始めていたことが確認できる⁽³³⁾。大友氏はその横岳氏から「稠被遂防戦、当城無別儀之由」との通報を受けているが、ここでまず大友・横岳関係についてみておくと、天文末年以降両者の関係が次第に深化しており、永祿末年から天正初期にかけての大友・龍造寺戦争においても、横岳氏は基本的に大友氏方